

[015]九州大学大学史料室ニュース

<https://hdl.handle.net/2324/2202989>

出版情報：九州大学大学史料室ニュース. 15, pp.1-, 2000-03-31. 九州大学大学史料室
バージョン：
権利関係：



九州大学

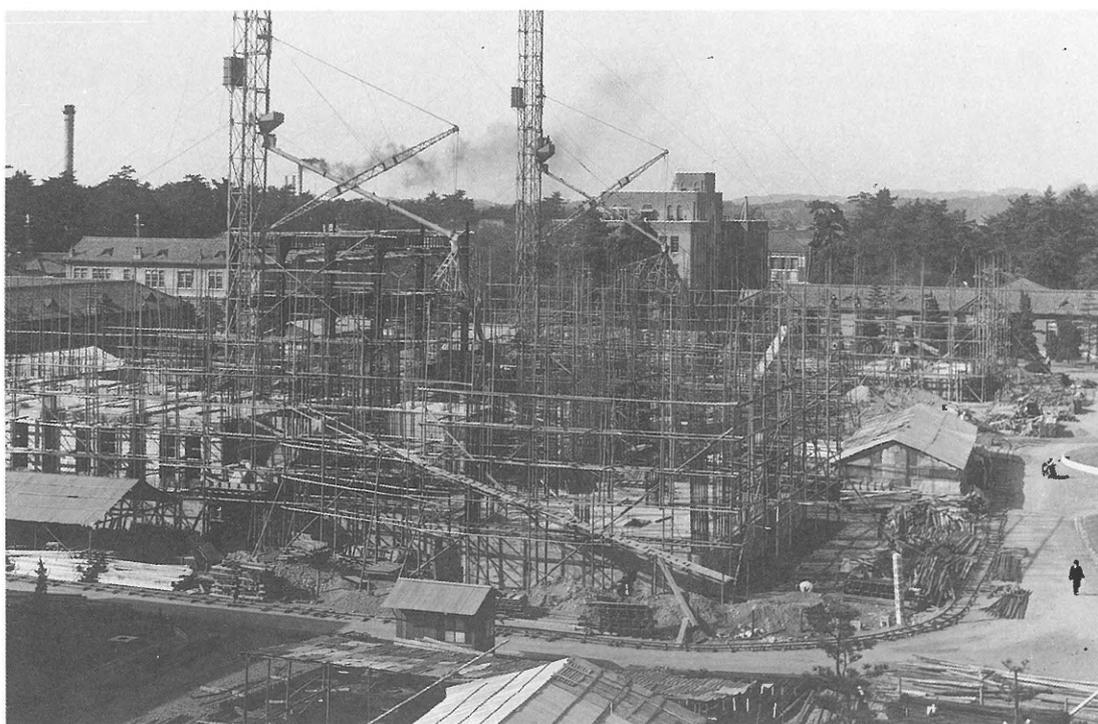
大学史料室ニュース

第15号

2000. 3. 31.

目 次

倉田謙と九大キャンパス	2
大正～昭和初期の福岡県下の高等教育機関 — 専門学校・実業専門学校 I —	5
九州大学大学史料室名簿	7
受贈図書一覧	7
大学史料室日誌抄録	8



工学部本館の建築工事（1929年頃）

九州大学（箱崎地区）を代表する建物である工学部本館の建築開始当時の写真である。右上に九大で最も早く建てられた工学部事務室（平屋建。1911年3月竣工）が見え、中央上には1927年（昭和2）10月に完成した応用化学教室が見える。この写真は法文学部本館の屋上から撮影されたものである。工学部本館は1928年11月に起工し、2年後の1930年（昭和5）11月に竣工している。設計は建築課長の倉田謙（倉田については本号2頁以下参照）。昭和初期のキャンパス風景を伝える貴重な写真である。

倉田謙と九大キャンパス

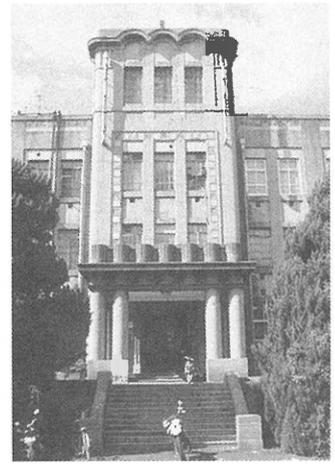
福田晴虔

30年以上も前のことだが、あるフランスの学者が、フランスの大学の危機的状況を最も端的に示しているのがその建物の貧しさであるという趣旨の文章を書いていた。コインブラやゲッティンゲン、パドヴァなどと比べ、フランスの大学の建物は大学らしい知性や精神性をまったく欠いており、これは大学のシステムに欠陥があることを示しているというのである。エリート意識の強烈なフランスの大学にしてこのように言われなければならないのだとすれば、劣悪な施設しかあてがわれていない日本の大学には、いったいどのような評価が下されてしまうのか、いささか背筋が寒くなってしまっただが、この発言は、建物のデザインの良し悪しとか立派さ・便利さのことを言っていたわけではなく、大学がその建物をどのように扱ってきたか、そしてそのことによって建物がどのような風格をそなえ、街に対してどれだけ大学らしい雰囲気を与えてきたかを問題にしていたのであって、大学の「顔」としての建物の重要性を述べたものであった。たとい質素なものであろうと、古い建物をいつくしみ大切に使うことによって、大学は人々の心にその存在のあり方を印象付けることができるというのが趣旨であると理解したい。その意味でなら、パドヴァやゲッティンゲンのようにはゆかないまでも、九州大学もそれなりに「顔」となるような建物を抱えており、「システムの欠陥」は云々されずに済むことを期待したい。

箱崎・病院両地区ともに、明治草創期の建物はまったく遺っておらず、最も古いものでも大正初年までしか遡らない。これは当初木造の建物が多く火災に遭ったりしたためもあるが、九州大学創設の複雑な経緯も手伝っており、致しかたのないところであろう。またこのことはキャンパス内の建物群の配置にも大きく影響しており、メインストリートがどれなのかよくわからないとか、理工系・文系・農学部系それぞれのキャンパスの有機的な連携がないなど、ほとんどマスタープラン不在といつてよいような雑然たる状況にある。しかしその雑然たるなかに遺る古い建物たちはなかなか個性的であり、あるいはキャンパスの雑然さのおかげでかえってその強烈な個性が際立って見え

ているような感がなくもない。

特に異色を放っているのが、大正後期から昭和初期にかけての時期に箱崎地区に建てられたものたちで、赤レンガの古めかしいもの—たとえば箱崎キャンパスの現本部事務局棟



旧法文学部本館（大正14年）

（大正14年、当初は実験棟として用いられた）—から分離派風の鉄筋コンクリート造（大正14年の旧法文学部本館、現環境システム工学棟や現在は食堂として使われている旧図書館、昭和5年建設の工学部本館など）まで、スタイルはきわめて雑多であって、しかもお世辞にも洗練されているとは言い難いのだが、よその国立大学の整然としたキャンパスには見られないような異様な迫力を見せている。これはこの時期、九州大学の建物の計画を一手に引き受けていた建築課長の文部省技師、倉田謙の個性によるところが大きい。

倉田は明治44年から九州大学技師の職にあり、かたわら講師として建築構造を教えるなどしていたが、まもなく文部省福岡出張所の技師を兼ね、九州帝国大学工科大学臨時建築掛を監督することとなる。従って、倉田はすでに明治末年から九州大学の建物の設計を手がけていたはずであるが、建物の多くは木造であったり、レンガ造の倉庫であったりしたため、現存するものはほとんどなく、また大正後期までは、明らかに倉田の設計と分かるような個性は発揮していなかったようである。臨時建築掛は大正7年には大学建築課となり、倉田は初代課長として昭和4年までその職にあったが、この時期が倉田の独壇場である。この間に彼が設計を手がけたかないしはその監督指揮に当たった大学内の建物は大小とりまぜて40棟近くもある。しかもこれと並行して、熊本市庁舎（大正13年、現存せず）の設計も行っているし、昭和5

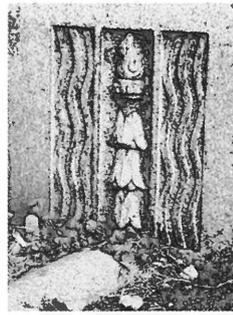
年に竣工した門司市庁舎(現北九州市門司区役所)の設計も、すでに課長在任中に手がけられていたと思われる。この時期、九州では倉田のような技術者はきわめて希少であったから、これまで知られている以外にも倉田の関与した大学外の建物はまだかなりあったと考えてよい。倉田の退任後の消息はよくわからないが、設計事務所を開いており、昭和15年に逝去したと記録されている。

この時期、地方の国立大学では、倉田と同様な文部省技師がキャンパス内の建物の設計を一手に手がけるといった例は決して珍しくはなく、たとえば京都大学でも明治30年代から大正初期にかけて、山本治兵衛という技師が多く建物を設計していたが、その後は武田五一や大倉三郎といったプロフェッサー・アーキテクトの出現によって、その個性は埋没してしまう。その点で、倉田による九州大学箱崎キャンパスは、倉田の強烈な個性が突出しているまことに特異な例といえることができる。彼の建築意匠に対する好みは分かれることだろうが、彼の建物がなかったなら、まったく無性格な、しかも乱雑なだけのキャンパスとなってしまうであろう。箱崎キャンパス内だけでも一人の建築家の十数年間にわたる主要作品がそろっているというのも珍しく、建築学上きわめて興味深い。

倉田の作風の特徴は、愚直なまでに左右対称の構成を守り、中央部を高く持ち上げて正面に見栄を切ってみせるという、いかにも明治・大正期の官庁建築家らしい手法にある。工学部本館のような規模の大きい建物ではこれは非常に効果的であるが、ベンチャービジネス・ラボラトリーのとりにある応用物質化学科別館(大正14年建設)のようなかわいらしい建物にまで、そうしたやり方を押し通している。これは学生時代に叩き込まれた古典主義的な常套手法のくせが抜けなかったためであろうが、このような建築手法ではなかなか都市的な「ストリート」は構成できない。大学構



応用物質化学別館(大正14年)



上: 応用化学教室玄関脇の装飾



右: 応用化学教室(昭和2年)

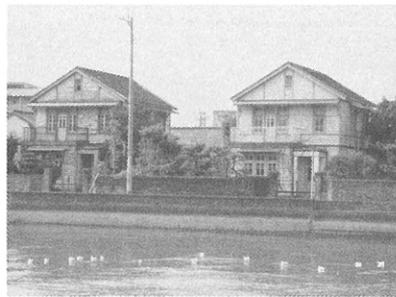
内のように道路からの規制を受けにくいオープンな敷地でないと成り立たない手法である。初期の箱崎キャンパスの配置図を見ると、農科大学との連結がないのは致し方ないとして、それぞれのキャンパスではそれなりに完結した、整った「マスタープラン」が存在していたようである。しかしその後必要に迫られて多くの研究室棟や実験棟などが、こうしたてんでに見栄を切っている倉田の建物群の間を埋めてゆくようになると、観客がいなくて見栄を切るようなことになって、結果は悲劇的というよりいささか喜劇的になってしまう。

倉田の建築のもう一つの特徴は、上のような剛直とも言うべきヴォリューム構成に対して、壁面の仕上げに異常なほどの繊細な神経を使っていることである。地蔵の森のとなりの応用化学教室(昭和2年)や工学部本館に典型的に見られることだが、建物内部の構成とはほとんど無関係に、外壁タイルの貼り方を変え壁面に凹凸を与えて、光の効果によって微妙にその色合いを変えて見せるのである。これは大正後期に始まったいわゆる「分離派」の手法からの影響と見られるが、オープンな敷地の場合、見る人の位置によって印象が異なるので、なかなか面白い。旧門司市役所の場合も海峡を見渡す高台にあたりを睥睨するように建っているため、非常に効果的なのだが、近年タイルが張り替えられてしまったので、効果が半減してしまった。

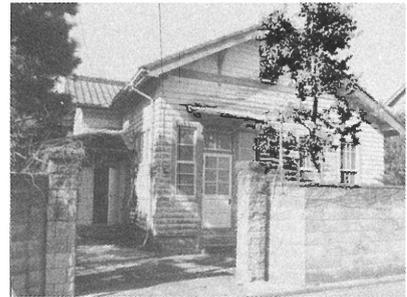
倉田は初期の臨時建築掛時代に多くの木造の建物を手がけている。それらのほとんどは現存せず、また記録がはっきりしないため、彼が関与したのかどうか確証のない場合が多い。しかし農学部キャンパスの中の熱帯農学研究センター(昭和2年)などは、その頑固な対称性志向から見て、倉田が関わった可能性が高い。下見板張りで角や開口部の縁取りに柱型をつける軽快な手法は、明治



熱帯農学研究センター（昭和2年）



西新外人教師宿舎（大正13年）



西新外人教師宿舎（昭和2年）

末期から大正期にかけての日本中の旧制高校や中学の校舎などに見られた手法であるが、倉田の手にかかると、むしろ重厚な雰囲気を作り出してしまふ。

これも倉田関与の確証がない建物だが、西新の樋井川べりにある九大教職員宿舎（旧制福岡高校の教員宿舎）も、こうした倉田の作風と通ずるものがあり、興味深い。ここには和風の建物3棟（平屋2棟が大正13年、2階建てのもと総長宿舎は昭和29年）と3棟の外人教師用の洋館（2階建て2棟が大正13年、平屋1棟が昭和2年）があり、和風建物については確かめるすべはない（九大に移管される前の資料は戦災で焼失してしまったらしい）が、洋風の3棟については、濃厚な倉田臭がある。実測してみると、洋館であるにもかかわらず躯体の寸法を頑固に寸法の完数で計画している（これは倉田のやり方であったらしい、実は小屋組みも和風小屋組みとなっている）ところや、細部の納まりにはあまり頓着していないらしい豪快なやり方など、倉田らしいと思わせるところが多い。こうなると和風の建物（戦後の総長宿舎は別として）についても、もしかして倉田が関わったのではないかと憶測を逞しくしたくなるのだが、これについては現在までのところなんとも言えない。

倉田がこれらに関与したかどうかは別としても、これらの西新の宿舎群は、大正から昭和にかけての官舎の実例として非常に興味深いものである。和風平屋はそれぞれ30坪ほどの中規模（間取りはかなり異なる）であるが、官舎とはいえかなりしっかりとした造りで、座敷なども嫌味がない仕上がりである。現在明治村に移築されている夏目漱石の家と比べてみたくなる建物である。2階建て洋館（2棟ともほとんど同じ間取り）は残念ながらかなり傷んでいるし、内部の造作などもまことに無骨・おおまかで、文部省営繕の標準設計に若干の手を加えた程度かとも思わせるが、これらが2棟ならんだ樋井川沿いの景観はなかなか魅力的で

ある。

平屋建て洋館は2階建てのものよりやや時代が下がるせいか、かなり手法が異なっている。洋風でありながら屋根は和瓦葺きで外観はおとなしい。下見板張りの建物角部に柱型をとりつけることもしていない。その一方では窓は分銅を仕込んだ上げ下げ窓であったり、食堂と台所の間のハッチが凝った戸棚（オーストリアの「ゼツション」＝分離派の影響を想わせる）となっていたり、また居間と食堂境に瀟洒な白いしおり戸を取り付けているなど、懸命にモダンな洋風意匠を取り入れようとしているところがまことにほほえましい。しかしこの時期わざわざ流行遅れの上げ下げ窓を使ったり、開口部額縁に不器用な洋風くり型をつけたりしているところは、少々アンバランスである。しかしこのアンバランスさがある意味ではこの建物の魅力でもあり、それが倉田謙の作風の特徴であるように思われる。これはまた九大の学風と一脈通ずるところがあるのではあるまいか。

倉田謙のことだけで紙数を費やしてしまったが、まだこの他にも箱崎地区には幾つか注目すべき建物がある。昭和14年建設の航空学教室（当時の建築課長であった島岡春三郎の設計、構造設計担当はその後丹下健三の建物の多くの構造を手がけた坪井善勝教授）は、戦時中の擬装のため壁がまだらに塗られて見る影もないが、九大構内にはめずらしいモダニズムの佳作である。また戦後の建物であるが、建築学教室（旧館、昭和33年）は、コルビュジェに心酔していた本学名誉教授光吉健次氏の若き日の力作だし、50周年記念講堂（昭和42年）も同じく光吉教授の設計になる（たまたま本稿稿了直後、光吉先生ご逝去の報に接した。ご冥福をお祈りしたい）。これらの建物はそれぞれに時代の息吹を伝える忘れがたいものであり、こうした遺産をどのように処遇してゆくかによって、大学の知的システムの如何を問われることとなるのではあるまいか。

（大学院人間環境学研究科教授）

大正～昭和初期の福岡県下の高等教育機関

－ 専門学校・実業専門学校 I －

折 田 悦 郎

高等教育制度

学校の体系が確立をした明治後期以降、わが国の高等教育制度は、大学（帝国大学）、高等学校、専門学校、実業専門学校という4つの類型の高等教育機関から成り立っていた。ただし高等学校は帝国大学への予備教育機関であり、専門学校と実業専門学校は、ともに専門学校令（明治36年3月）によって規定された学校であったから、大きくは①中学校→高等学校→大学（帝国大学）というコースと、②中学校→専門学校・実業専門学校というコースの、二つの系列があったことになる。

このうち①は男子に限定されたコースで、政財官界のリーダーを輩出し続けたエリートコースであった。これに対して②の専門学校は医学、歯学、法学、文学等の、また実業専門学校は、工業、農業、商業等の専門教育を行なう機関で、修業年限は3年～4年。①に比べ全体の修業年限が短くてすむ②の系列は、威信の一段低いものと見なされていたが（高等学校を経ないことから「傍系」と呼ばれた）、しかし戦前期の高等教育を一方で支えたのは、これらの専門学校群であった。専門学校は拡張策がとられた大正期以降増加し、その多くは戦後のいわゆる新制大学となり地域における基幹的高等教育機関となって行く。

ところで福岡県は、初等・中等教育において教育県「西の福岡」と呼ばれ、いくつかの高等教育機関が置かれた地域であった。既に明治期において九州帝国大学（明治44年1月）と明治専門学校（明治40年7月、遠賀郡戸畑町。九州工業大学の前身）が存在しており、大正期になると男子高等普通教育機関の福岡高等学校（大正10年11月、福岡市。旧九大教養部の前身）、女子高等教育機関の福岡県立女子専門学校（大正12年4月、福岡市。県立福岡女子大学の前身）のほか、西南学院高等学部（大正10年4月、福岡市。西南学院大学の前身）、九州歯科医学専門学校（大正10年7月、福岡市。県立九州歯科大学の前身）、九州医学専門学校（昭和3年2月、久留米市。久留米大学医学部の前身）等の学校が設立され始める。

今回と次回は、福岡県下の専門学校群に焦点を

当て、各校の創立について学校別に検討してみることにはしたい。他の高等教育機関の創立を知るとは、医・工の二科に農学部（大正8年4月）、法文学部（同13年9月）を設置して、名実共に総合大学としての歩みを始めた、この時期の九州帝国大学の特徴を考える上で、参考になると思われるからである。

西南学院高等学部

大正10年（1921）2月、文部省丘専1号により私立西南学院高等学部の設立が認可された。同学院は大正5年2月、米国南部バプテスト派から派遣された宣教師C・K・ドージャーを設立者として先ず中学部が創設され、次いで中学部の第1回生が卒業する大正10年、高等学部が設立されたものである。初代学部長は水町義夫。設立場所は中学部の西隣り、早良郡西新町の地であった。最初に「本学部ハ、高等普通ノ教育ヲ受ケント欲スルモノ、英語科教員タラント欲スルモノ、及ビ、実業ニ就カント欲スルモノニ、須要ナル教育ヲ施スヲ以テ目的トス」「本学部ニ文科及ビ商科ヲ置ク。修業年限ハ、各科共四ヵ年トス」等を内容とする、「西南学院高等学部規程」が制定されて、高等学部の基本構想とされた。設置申請書が文部省に提出されたのは、大正9年6月のことで、翌年2月には前述のように文部省の許可が下り、西南学院高等学部は専門学校令による専門学校となった。

第1回の入学試験は大正10年（1921）4月に実施され、文科19名、商科41名の志願者があったが、検討の結果全員の入学が許可された。同年末には文科10名、商科23名、計33名の在学者が知られている。出身学校では当然ながら西南学院中学部が13名と最も多く、また全体の7割が県内中等学校の出身者であった（『西南学院七十年史』上巻）。

同校の特色は、3年制の実業系専門学校が多い中、文科を有する4年制の専門学校であり、また当時の西日本では唯一のキリスト教系高等教育機関であるという点にあったが、大正11年12月には、さらに神学科の増設が認可されて（文部省丘専19号）、キリスト主義の文系専門学校としての形態が



西南学院中学部第1回卒業生及び教職員。卒業生29名のうち13名が新設の高等学部に進学した。[大正10年3月]

整った。

このように創設期～大正末年にかけて、西南学院高等学部は順調に発展を遂げていったが、昭和初期になると、学生に日曜日の礼拝出席を義務づけスポーツ試合を禁止したことで学生側のストライキを招いた、いわゆる「日曜日問題」や、職員間の内部対立問題が起こってきた。その結果、昭和4年（1929）7月には、混乱の責任を取るかたちで設立者のC・K・ドージャーが学院長を辞任することになり、学院の経営は次のG・W・ボールデン等に引き継がれることになった。

福岡県立女子専門学校

女子の中等教育機関、いわゆる高等女学校・実科高等女学校は、明治後期以降次第に発展を遂げ、大正期になると量的にも大きく拡大をした。福岡県の場合にも、明治44年（1911）に9校・2,631人であった高等女学校数・生徒数は、大正10年（1921）には20校・8,602人と大幅な増加を見た。大正11年6月、福岡市須崎裏町に設立された福岡県立女子専門学校は、このような女子中等教育の拡大と、大正デモクラシーの風潮のもとで盛んに行なわれた女子の高等教育問題に関する議論等を背景として、創設されたものである。同校は全国で初めての公立の女子専門学校であり、以後大阪、宮城、京都、広島、長野と相次いで同様の公立女子専門学校が設立されていった。

従来、女子の高等教育機関といえば官立の女子高等師範学校（東京〈現お茶の水女子大学〉、奈良〈現奈良女子大学〉）と女子学習院を除くと、いずれも私立の専門学校に限られており、歴代の内閣も女子高等教育機関の新設・増設には極めて消極的であった。女子の大学や高等学校、官立の女子専門学校等の設置は認められず、わずかに大正9年（1920）7月、高等女学校令を改正して、

高等女学校に高等科・専攻科の設置が認められただけである（勅令第199号）。そのため福岡県でも、福岡県教育会等による専攻科設置の意見が見られたが、しかし、当時の安河内麻吉福岡県知事は、女子高等教育機関として女子高等学校、女子専門学校設置の構想を持っており、大正8年10月には、女子高等学校案折衝のために波多野俊夫県視学等を上京させた。この女子高等学校案は、結局文部当局の容れるところとはならなかったが、このような安

河内知事の積極策が福岡県立女子専門学校創設の原動力となったことは間違いない。

大正10年12月、福岡県議会は、前年度に一旦は否決した福岡県立女子専門学校設立議案を可決し（経費24万9,801円）、また福岡市や地元婦人団体からも創設のための寄付がなされた。例えば、当時福岡市には、安河内知事夫人、久世庸夫福岡市長夫人、真野文二九州帝国大学総長夫人等を中心とする福岡婦人会があったが、同会を中心にして「女子専門学校設立期成会」が生まれ、県立女子専門学校設立の運動が行なわれている（『福岡女子大学五十年史』）。

こうして大正11年6月、専門学校令に基づき福岡県立女子専門学校の設置が認可され（文部省告示第451号）、翌年の4月に開校がなされた。初代校長は女子の中等・高等教育に造詣の深かった東京帝国大学講師小林照朗。同校は「女子ニ適切ナル高等ノ學術技芸ヲ教授スル」「特ニ国民道德ノ充実及ビ婦徳ノ涵養ニカム」ことを目的とする3年制の専門学校で、文科、家政科の2科からなっていた。大正12年4月に行なわれた第1回の入学試験では、文科科40名、家政科40名の募集に対し、各々182名（競争倍率4.5倍）、155名（同3.8倍）の志願者があり、入学者の出身地は福岡を中心に1府9県と外地（「朝鮮」、「満州」）にまで及んでいた。

同校は、大正14年（1925）4月、校名を福岡県立女子専門学校から福岡県女子専門学校と改称し、昭和4年（1929）からは、文部省による中等教員免許状（無試験検定）の下付が行なわれるようになり、九州における唯一の女子高等教育機関として発展していくことになる。（大学史料室専任講師）
〔付記〕

*掲載写真は、西南学院大学広報課の提供によるものである。記して謝意を表します。

九州大学大学史料室名簿

室長	人環	研教授	新谷 恭明	兼任	比文	研教授	有馬 學
専任		講師	折田 悦郎	〃	石炭	研教授	東定 宣昌
兼任	文学部	助教授	佐伯 弘次	事務補佐員			馬場 恵
〃	法 院	教授	植田 信廣	〃			筑紫 啓子
〃	経済学部	教授	荻野 喜弘				(2000年3月1日現在)

受贈図書一覧 (1999年7月～12月)

芳草 「大平得三・操夫妻をしのぶ会」記録		阿武聰信・立田清朗	1991. 4
大平昌彦	1986. 3	[一般教養] 現代物理化学	
退官記念 中村洋博士論文選集	1998	阿武聰信 [ほか]	1988. 3
島田良一教授退官記念誌		量子化学 基礎の基礎	
島田良一教授退官記念事業会	1991. 12	阿武聰信	1996. 6
いのちの流れ		下関市立大学論集 第39巻第2・3合併号	
柳瀬敏幸	1988. 8	下関市立大学学会編	1996. 1
師 山岡憲二		若き日の九州文化史(「西南地域史研究」第六輯所収)	
九州大学医学部第一内科同門会	1987. 11		
内科学進歩のトピックス		秀村選三	1988
仁保喜之・石橋大海編	1998. 4	わが愛する九州文化史研究所よー思い出と再興への願いー(「西南地域史研究」第九輯[一九九四年]所収)	
An approach to diseases-Immunology, Hematology, Cancer-		秀村選三	1994
Yoshiyuki Niho et al.	1996	俣野仲次郎ー相互拡散の“Matano Interface”に不朽の名を残す研究者の軌跡・俣野仲次郎の拡散研究(まてりあく日本金属学会会報>第38巻第6号, 第10号[1999]掲載「資料」別刷合冊)	
Molecular and Genetic Approaches to Diseases -Immunology, Hematology and Oncology-		小岩昌宏	1999
Yoshiyuki Niho et al.	1998	学徒出身見習士官の思想・素描(皇學館論叢 第三十巻第五号抜刷)	
日本ヴィジュアル・ポエジー		山口宗之	1997. 10
詩を見る 日独ヴィジュアル・ポエトリエ展		海軍予備学生の思想・素描(久留米工業大学研究報告 No.22 1998抜刷)	
日独ヴィジュアル・ポエトリエ展企画実行委員会編	1999. 9	山口宗之	1998
日本現代詩歌文学館 特別企画展「日独ヴィジュアル・ポエトリエ展」図録別冊		松の実 第34号	
古谷晋一 [ほか] 訳	1999	九州大学女子卒業生の会(松の実会)	
九州大学整形外科学教室同窓会誌(教室開講90周年記念誌)	1999. 11		
九州大学整形外科学教室同窓会編		九州大学歯学部同窓会広報 第32号	1999. 11
ELECTRON MICROGRAPHS OF PARASITIC HELMINTHS		九州大学歯学部同窓会	1999. 8
Yoichi Ishii et al.	1991	九州大学歯学部同窓会会報 第16号	
基礎物理化学		九州大学歯学部同窓会	1999. 12
阿武聰信・立田清朗	1967. 4	[凡例]	
基礎物理化学 改訂版		今回の一覧は九大関係図書(資料)を中心とし、コピー類については省略した。	
阿武聰信・立田清朗	1979. 2		
基礎物理化学 第3版			
阿武聰信・立田清朗	1982. 3		
基礎物理化学 (第4版)			

大学史料室日誌抄録(1999年7月～12月)

- | | | | |
|------------|--|------------|---|
| 7. 12 (月) | 管財課より史料受領。 | | 佐伯広助氏より史料寄贈。 |
| 7. 16 (金) | 筑紫啓子氏、大学史料室事務補佐員採用。 | 10. 28 (木) | 第23回大学史料室運営委員会開催。 |
| 7. 19 (月) | 阿武聰信名誉教授、史料寄贈のため来室。
学務部所蔵文書、大学史料室へ移管。 | 10. 30 (土) | 『大学史料室ニュース』第14号刊行。 |
| 8. 1 (日) | 折田講師、第4回旧制高等学校記念館夏期教育セミナーに参加(～2日。於長野県松本市)。 | 11. 4 (木) | 折田講師、第1回文化財ワーキンググループに出席。
法学部庶務掛より史料受領。 |
| 8. 5 (木) | 二見剛史志学館大学教授より史料寄贈。 | 11. 17 (水) | シンポジウム「大学における低年次教育の意義－試行授業を行って－」開催(コーディネーター＝新谷委員長。話題提供者＝寺崎昌男桜美林大学教授/押川元重教授/折田講師)。 |
| 8. 10 (火) | 企画調査室より史料受領。 | 11. 22 (月) | 折田講師、福岡県高等学校歴史研究会日本史部会において「九州帝国大学の創設」講演(於修猷館高等学校)。 |
| 8. 31 (火) | 大学入試センター福岡進学情報サービス室より史料寄贈。 | 12. 3 (金) | 秀村選三名誉教授、根本實名誉教授より史料寄贈。
岩本幸英大学院医学系研究科教授より史料寄贈。 |
| 9. 3 (金) | 根本實名誉教授より史料寄贈。 | 12. 8 (水) | 石井洋一名誉教授より史料寄贈。 |
| 9. 9 (木) | 阿武聰信名誉教授、史料寄贈のため来室。 | 12. 9 (木) | 二見剛史志学館大学教授より史料寄贈。 |
| 9. 20 (月) | 上村弘雄名誉教授より史料寄贈。
折田講師、全国大学史資料協議会1999年度総会・全国研究会に参加(～22日。於金沢大学)。 | 12. 13 (月) | 島田良一名誉教授、史料寄贈のため来室。 |
| 10. 3 (日) | 折田講師、第43回教育史学会大会に参加(コロキウム「大学アーカイブスの今日的課題について」オルガナイザー。於北海道大学)。 | 12. 15 (水) | 松田博嗣名誉教授、史料調査のため来室。 |
| 10. 13 (水) | 1999年度後期「大学とは何かーともに考えるー」開講。 | 12. 16 (木) | 山口宗之名誉教授より史料寄贈。 |
| 10. 15 (金) | 1999年度後期「九州大学の歴史」開講。 | 12. 22 (水) | 農学部附属演習林より史料調査のため来室(～23日)。 |
| 10. 26 (火) | 大久保正夫名誉教授より史料寄贈。 | 12. 24 (金) | 西日本新聞社記者、九州帝国大学創設の件につき調査のため来室。 |

九州大学大学史料室ニュース 第15号

発行日 2000年3月31日(年2回刊)

編集
発行

九州大学大学史料室
〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1
電話・FAX (092) 642-2292

Archives of Kyushu University

印刷 ㈱サガプリンティング